

児童館の利用が子どもの遊びや生活に与える影響

ヤ エ ガシ マキ コ
八重樫 牧子*

目的 子どもの遊びの実態を明らかにするとともに、児童館の利用が子どもの遊びや生活にどのような影響を与えているのか検討することを目的とした。

方法 平成15年6～7月、小学3年生950人を対象に子どもの遊びや生活について、留め置き自計によるアンケート調査を実施した。有効回答数は917人（有効回答率97%）であった。子どもの遊びや生活に関する15項目を得点化し、児童館利用との関連性を検討した。

結果 子どもは、小人数の同年齢（同じクラス）の友達と、屋外ではスポーツや運動、屋内ではパソコン・テレビ・ゲームで遊んでおり、受動的な遊び方と能動的な遊びが共存していることが明らかになった。遊び友達の人数は男子の方が多かった。児童館を利用している子どもは3割弱と少なかったが、男女差は認められなかった。子どもの遊び・生活に関する15項目については、女子の平均点が高く、因子分析の結果から得られた「共感性得点」「自主性得点」「表現・鑑賞得点」のいずれも女子の方が高かった。児童館を利用している子どもと利用していない子どもの遊び・生活の平均得点については有意差が認められなかったが、得点の高い群に児童館を利用している子どもが多く、有意差が認められた。単回帰分析の結果、児童館の利用頻度が高いと共感性が高くなり、遊び友達の人数が多くなると推察された。しかし、重回帰分析の結果からは、子どもの遊び・生活得点に影響を与える要因は、性別、塾・習い事、遊び友達の人数であり、児童館利用頻度との間に関連性は認められなかった。また、遊び友達の多い子どもほど児童館をよく利用していることが推察された。

結論 児童館を利用する子どもは遊び友達が多く、また、児童館を利用することによって遊び友達も多くなることが明らかになった。遊び友達が多い子どもほど子どもの遊び・生活得点が高くなっており、子どもの仲間集団の重要性が示唆された。今日、地域社会の遊びの拠点として位置づけられた児童館は、子どもが豊かな遊びを展開し、子ども同士・子どもと大人の相互行為を通じて、社会力や対人関係能力を育てることができるとして重要な役割を担っていると言える。

キーワード 児童館、遊び、児童健全育成、仲間集団、社会力

I はじめに

都市化や核家族化、そして少子化の進行により、家庭や地域社会における子育て・子育て状況が大きく変わりつつある。遊び場は屋外から

屋内へと変化し、子どもたちは塾や習い事に追われ遊び時間も少なくなり、遊び仲間は異年齢を含む大人数の集団から小人数の集団になり、いわゆる「3間の喪失」が顕著になってきている。このことは、子どもの心身の発達に悪影響を及ぼすと言われている^{1)~4)}。このような状況の中で、地域の健全育成の拠点施設として、児童

* 川崎医療福祉大学医療福祉学部助教授

福祉施設の1つである児童館の果たす役割が期待されている^{注1)}。

児童館を利用することが、子どもにどのような影響を与えているかについては、次のような先行研究がある。児童育成研究会⁵⁾は、小学生と中学生を対象に児童館・図書館利用の実態やその利用効果について調査研究を行い、児童館や図書館の利用体験が子どもの心身の発達を促進することを指摘している。また、児童館の現状と可能性に関する調査研究会⁶⁾は、小学2年生の子ども、小学生や幼児を持つ保護者を対象に調査研究を行い、児童館を利用している子どもと利用していない子どもとでは遊びの内容や生活の関心事に異なった特徴があることを示唆している。しかし、児童館を利用している子どもと利用していない子どもを比較し、児童館の利用が子どもの遊び、発達、生活に与える影響について検討した研究は必ずしも多くない。

そこで、本研究では、子どもの遊びの実態を明らかにするとともに、児童館の利用が子どもの遊びや生活にどのような影響を与えているのかについて検討することとする。

なお、平成14年7月に小学3年生130人を対象に筆者が行った予備調査では、児童館を利用している子どもは必ずしも多くないが、児童館を利用することによって、「表現力」や「自主性」が養われることが推察された⁷⁾。

Ⅱ 研究方法

(1) 調査の対象・方法・内容

調査対象は、無作為に選出したA県B市内の小学校8校の小学生3年生であり、調査は平成15年6～7月に実施した。調査方法は、留め置き自計とし、担任教員を通して児童950人にアンケート用紙を配布し、後日、回収した。有効回答数は917人（有効回答率97%）であった。なお、平成15年5月10日現在で、B市には55の小学校があり、4,140人の小学3年生が在籍している。

調査内容は、①児童の属性7項目（年齢、学年、性別、家族構成、母親の就労状況、放課後家にいる家族、塾・習い事の頻度）、②友達について2項目（友達、遊び友達の人数）、③遊びについて5項目（遊ぶ頻度、遊ぶ人、遊び場、遊び方、外で遊ぶこと）、④児童館について3項目（認知、利用の有無、利用頻度）、⑤学童保育1項目（経験の有無）、⑥遊びや生活に関する変化の児童館利用効果について15項目^{注2)}である。

(2) 分析方法

①友達、遊び、児童館利用について男女差を検討するためにクロス表を作成し、 χ^2 検定を行った。②子どもの遊びや生活についてその構造を検討するために因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行い、因子の検討を行った。③遊びや生活の変化に関する15項目について得点化し、それぞれの項目について平均得点を算出した。児童の性別および児童館の利用有無による平均得点のt検定を行い、有意差を検討した。また、児童館利用頻度を独立変数とする単回帰分析を行った。さらに、性別、塾・習い事の頻度、遊び友達の人数、遊ぶ頻度、児童館利用頻度、学童保育経験が、遊びや生活の変化に関する項目得点にどのような影響を与えているかを検討するために、重回帰分析を行った。統計処理ソフトはSPSS WINDOWS版Ver11.5を使用した。

表1 対象の属性 (n=917)

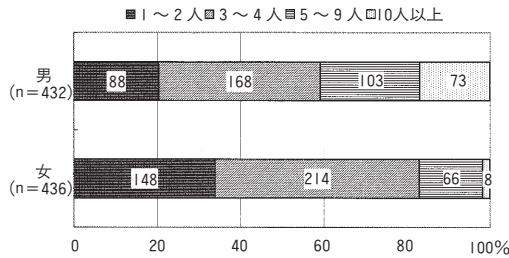
性別	男460人(50.2%)、女453人(49.4%)、不明4人(0.4%)
家族構成	核家族565人(61.6%)、三世大家族255人(27.8%)、ひとり親家族44人(4.8%)、ひとり親三世大家族26人(2.8%)、その他27人(2.9%)
母親の就労有無	就労有594人(64.8%)、就労無299人(32.6%)、不明24人(2.6%)
学校から帰ったときの家族の有無	たいていいつも誰かいる479人(52.2%)、時々いる263人(28.7%)、いないことが多い81人(8.8%)、いない64人(7.0%)、不明30人(3.3%)
家に帰ったときにいる家族	父90人(9.8%)、母531人(57.9%)、祖父29人(3.2%)、祖母114人(12.4%)、その他50人(5.5%)、不明103人(11.2%)
塾・習い事	ほぼ毎日133人(14.5%)、週2～3回342人(37.3%)、週1回203人(22.1%)、通っていない206人(22.5%)、不明33人(3.6%)

Ⅲ 研究結果

(1) 調査対象

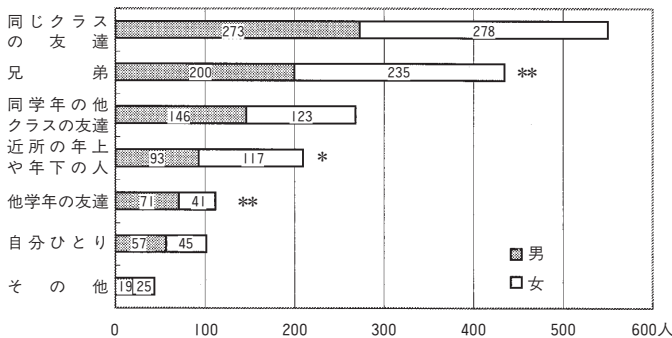
性別は、やや男子が多かったが、ほぼ同数であった。家族構成については、厚生労働省の平成15年国民生活基礎調査⁸⁾では三世代家族が

図1 遊び友達の数 (n=868)



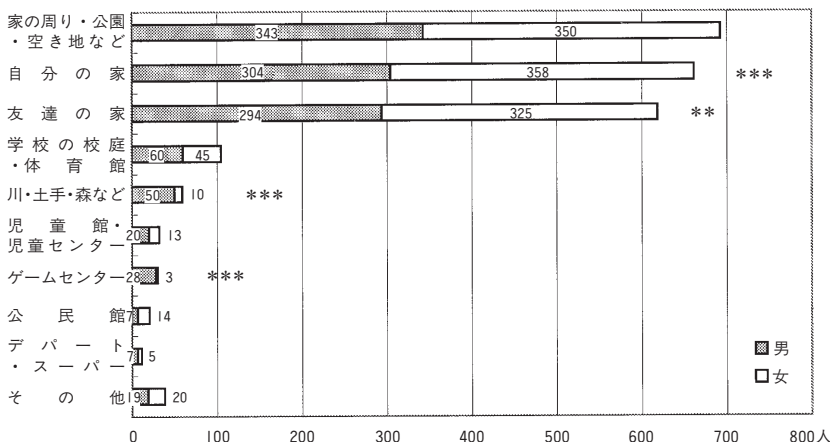
注 1) $p < 0.001$
2) グラフ内の数字は回答人数

図2 一緒に遊ぶ人(n=913)



注 1) $*p < 0.05$, $**p < 0.01$
2) グラフ内の数字は回答人数

図3 遊ぶ場所(n=913)



注 1) $**p < 0.01$, $***p < 0.001$
2) グラフ内の数字は回答人数

10.4%であるのに対し、本調査では27.8%と多くなっていた。64.8%の母親が就労していたが、学校から帰ったとき、家族がいないことが多いあるいはいないと答えた者は15.8%であった。学校から帰ったときにいる家族は母親が57.9%と多かったが、祖母も12.4%いることがわかった。塾・習い事に通っていないと答えた者は22.5%で、73.9%が塾・習い事に通っており、週2～3回と答えた者が37.3%と多かった(表1)。

(2) 友達・遊び友達と子どもの遊び

友達の数については、15人以上と答えた者が534人(58.2%)で最も多かったが、普段遊ぶ友達は、3～4人と答えた者が382人(44.0%)と最も多くなっていた。友達の数について男女差は認められなかったが、実際に遊ぶ友達の人数は男子の方が多く0.1%の危険率で有意差が認められた(図1)。

遊ぶ頻度は、週1～2日が33.0%、週3～4日が20.5%、ほとんど毎日が29.3%とほぼ同じ割合であり、男女差もなかった。ただし、3.7%の子どもが遊ぶことがまったくないと答えていた。一緒に遊ぶ人については、同じクラスの友達が551人(60.4%)と最も多く、次いで兄弟が435人(47.6%)となっていた。男女差については、兄弟

や、近所の人については女子の方が多く、他学年の友達は男子の方が多くなっていた(図2)。遊ぶ場所については、家の周り・公園・空き地などが693人(75.9%)、自分の家が662人(72.5%)と多く、次いで友達の家が619人(67.8%)となっていた。児童館や児童センターを選択した者はわずか33人(3.6%)

表2 男女、児童館利用有無別にみた子どもの遊び・生活得点

項 目	全体 (n=917)		男女の t 検定 (n=913)						児童館利用有無の t 検定 (n=891)					
			男 (n=460)		女 (n=453)				利用あり (n=274)		利用なし (n=617)			
	平均値	標準 偏差	平均値	標準 偏差	平均値	標準 偏差	有意 確率	有意差	平均値	標準 偏差	平均値	標準 偏差	有意 確率	有意差
1 自分のことは自分でする	3.19	0.91	3.01	0.95	3.30	0.84	0.001	***	3.21	0.91	3.18	0.91	0.638	ns
2 学校での勉強が好きだ	3.08	0.99	2.98	1.02	3.17	0.95	0.004	**	3.12	0.97	3.05	1.00	0.313	ns
3 運動やスポーツをすることが好きだ	3.48	0.88	3.56	0.87	3.41	0.89	0.013	*	3.53	0.87	3.47	0.88	0.393	ns
4 絵をかいたり、ものを作ることが好きだ	3.50	0.89	3.30	1.04	3.70	0.63	0.000	***	3.53	0.85	3.50	0.90	0.660	ns
5 歌をうたったり、劇、人形劇をみるのが好きだ	2.91	1.15	2.48	1.19	3.35	0.93	0.000	***	2.95	1.13	2.89	1.16	0.533	ns
6 自分たちで劇、人形劇をすることが好きだ	2.42	1.17	2.14	1.15	2.70	1.12	0.000	***	2.40	1.19	2.44	1.16	0.632	ns
7 おおぜいの前で、発表したり、自分の考えを言える	2.60	1.10	2.66	1.13	2.56	1.07	0.174	ns	2.66	1.11	2.58	1.10	0.357	ns
8 友達がたくさんいる	3.66	0.75	3.61	0.82	3.70	0.66	0.070	ns	3.68	0.74	3.64	0.75	0.501	ns
9 友達や年下の子に、いろいろ教えるのが好きだ	3.04	1.05	2.85	1.11	3.24	0.96	0.000	***	3.14	0.99	3.01	1.07	0.108	ns
10 家の手伝いは自分からすすんでやる	2.94	1.06	2.78	1.11	3.11	0.97	0.000	***	2.99	1.02	2.91	1.07	0.311	ns
11 わからないことや心配事を相談できる相手がいる	3.16	1.10	2.93	1.18	3.37	0.96	0.000	***	3.21	1.09	3.13	1.10	0.344	ns
12 友達の手配事を聞いてあげられる	3.28	1.00	3.09	1.09	3.46	0.86	0.000	***	3.38	0.91	3.24	1.03	0.046	*
13 いろいろな遊びを知っている	3.20	0.92	3.23	0.96	3.18	0.88	0.480	ns	3.38	0.81	3.14	0.96	0.000	***
14 むだづかいをしない	3.30	1.01	3.18	1.07	3.41	0.95	0.001	***	3.32	1.00	3.29	1.02	0.686	ns
15 きまりや約束などは守ることができる	3.01	0.92	3.02	0.98	3.40	0.81	0.000	***	3.23	0.91	3.19	0.92	0.642	ns
平均	3.13	0.55	3.00	0.57	3.27	0.49	0.009	**	3.18	0.51	3.11	0.56	0.090	ns

注 1) ***p<0.001, **p<0.01, *p<0.05, ns有意差なし

2) 不明は除く。

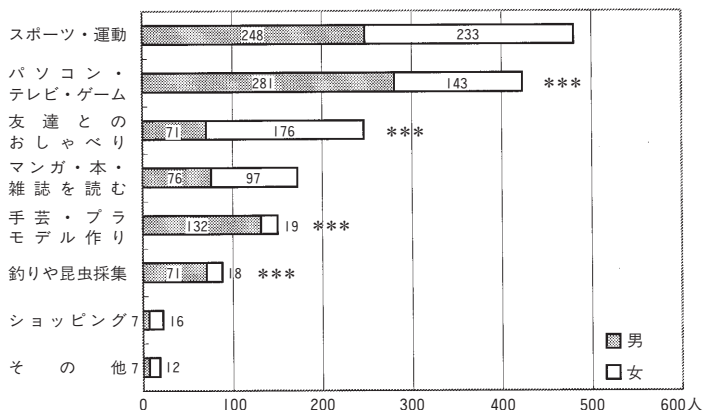
であった。自分の家や友達の家で遊ぶのは女子の方が多く、川・土手・森などやゲームセンターで遊ぶのは男子が多くなっていた(図3)。遊び方については、スポーツ・運動が481人(52.7%)、パソコン・テレビ・ゲームが424人(46.4%)とはほぼ同数であった。パソコン等やプラモデル作り、そして釣りや昆虫採集は男子が、友達のおしゃべりは女子が多く、0.1%の危険率で有意差が認められた(図4)。

児童館については、70.2%の者が知らないと答えており、児童館に行ったことのない者は67.3%、児童館に行ったことのある者は23.7%であったが、男女差は認められなかった。

(3) 子どもの遊びと生活

子どもの遊びと生活に関する15項目について、全体の平均得点、男女別と児童館利用有無別の平均得点、そしてそれぞれのt検定の結果を表2に示す。全体では、「友達がたくさんいる」の得点が高く、「自分たちで劇、人形劇をすることが好きだ」の得点が低くなっていた。男女別では、女子の15項目の平均得点が男子より高く、

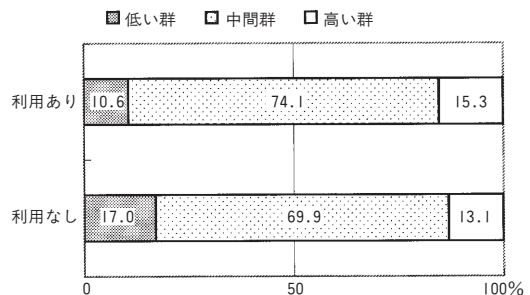
図4 遊び方(n=913)



注 1) ***p<0.001

2) グラフ内の数字は回答人数

図5 児童館利用経験と子どもの遊び・生活得点(n=891)



注 p<0.05

多くの項目で女子の方が男子より得点が高くなっており有意差が認められた。児童館利用有無

別では、児童館を利用する子どもと利用しない子どもの得点に違いはなかったが、「いろいろな遊びを知っている」と「友達の心配事を聞いてあげられる」については、児童館を利用する者の得点が高く、前者は0.1%の危険率で、後者は5%の危険率で有意差が認められた。

図5にみるように、子どもの遊び・生活得点の高い群と中間群と低い群に分け、これと児童館の利用有無をクロス集計し、 χ^2 検定を行った結果からは、児童館を利用したことがある子どもが得点の高い群に多く、5%の危険率で有意差が認められた。

子どもの遊びと生活に関する15の質問項目の因子分析をした結果、3つの因子を抽出することができた。表3にみるように、第1因子は「自分のことは自分でする」など自主性、第2因子は「友達の心配事を聞いてあげられる」など共感性、第3因子は「自分たちで劇、人形劇をすることが好きだ」「歌をうたったり、劇、人形劇をみるのが好きだ」など表現・鑑賞の因子であった。ただし、男女別に因子分析をすると因子の現れ方が異なっており、表として示してはいないが、男子は第1因子に共感性、第2因子に自主性、第3因子に表現・鑑賞の因子が現れていたが、女子は第1因子に自主性、第2因子に表現・鑑賞、第3因子に積極性、第4因子に共感性の因子が現れていた。しかし、いずれの因子得点も女子の方が高くなっていた。

(4) 子どもの遊び・生活得点と関連する要因

児童館の利用頻度が、性別、塾・習い事、遊び友達の人数、遊ぶ頻度、学童保育経験、子どもの遊び・生活得点にどのような影響を与えているか検討するために、児童館の利用頻度を独

表3 子どもの遊びと生活に関する項目の因子分析

	第1因子	第2因子	第3因子
寄与率 累積寄与率 因子軸名	27.809 27.809 自主性	3.988 31.797 共感性	3.318 35.115 表現・鑑賞
1. 自分のことは自分でする	0.608	0.126	0.147
15. きまりや約束ことは守ることができる	0.533	0.157	0.157
10. 家の手伝いは自分からすすんでやる	0.488	0.224	0.224
14. むだづかいをしない	0.423	0.169	0.169
3. 運動やスポーツをすることが好きだ	0.415	0.245	0.245
2. 学校での勉強が好きだ	0.411	0.287	0.292
12. 友達の心配事を聞いてあげられる	0.190	0.692	0.151
11. わからないことや心配事を相談できる相手がいる	0.175	0.549	0.222
8. 友達がたくさんいる	0.186	0.427	0.100
6. 自分たちで劇、人形劇をすることが好きだ	0.258	0.195	0.737
5. 歌をうたったり、劇、人形劇をみるのが好きだ	0.150	0.150	0.673

注 1) 主因子法、バリマックス回転を使用した。

2) は、因子分析により明らかとなった因子のかたまりを示す。

表4 児童館利用頻度との関連性(単回帰分析)

従属変数	独立変数	非標準化係数		標準化係数: β	t	有意確率
		B	標準誤差			
性別	定数	0.002	0.034		0.069	0.945
	児童館利用頻度	0.059	0.034	0.059	1.751	0.080
塾・習い事	定数	-0.005	0.034		-0.142	0.887
	児童館利用頻度	-0.043	0.034	-0.043	-1.073	0.203
遊び友達の人数	定数	-0.002	0.034		-0.048	0.961
	児童館利用頻度	0.130	0.034	0.129	3.791	0.000
遊ぶ頻度	定数	0.000	0.034		-0.006	0.995
	児童館利用頻度	-0.010	0.034	-0.010	-0.298	0.766
学童保育経験	定数	0.001	0.035		0.016	0.987
	児童館利用頻度	0.052	0.035	0.053	1.508	0.132
子どもの遊び・生活得点	定数	0.001	0.033		0.032	0.975
	児童館利用頻度	0.060	0.033	0.060	1.787	0.074
自主性得点	定数	0.003	0.033		0.098	0.922
	児童館利用頻度	0.044	0.033	0.044	1.327	0.185
共感性得点	定数	0.001	0.033		0.035	0.972
	児童館利用頻度	0.076	0.033	0.076	2.281	0.023
表現・鑑賞得点	定数	0.005	0.033		0.148	0.883
	児童館利用頻度	0.015	0.033	0.015	0.434	0.664

注 1) 児童館利用頻度 1:一度も行ったことがない、2:ときどき行く、

3:よく行く

2) 性別 1:男、0:女

3) 塾・習い事 1:ほぼ毎日、2:週1~2回、3:週1回、4:通っていない

4) 遊び友達の人数 1:1~2人、2:3~4人、3:5~9人、4:10人以上

5) 遊ぶ頻度 1:全くない、2:1~2日、3:3~4日、4:ほとんど毎日

6) 学童保育経験 1:行ったことがない、2:前に行ったことがある、

3:今行っている

7) 自主性、共感性、表現・鑑賞得点は、子どもの遊びと生活の変化に関する得点を因子分析した結果の因子得点

立変数とする単回帰分析を行った結果を表4に示す。関連性のあった項目は、遊び友達の人数($p<0.001$)と共感性得点($p<0.05$)であった。

次に、性別、塾・習い事、遊び友達の人数、遊ぶ頻度、児童館利用頻度、学童保育経験を独立変数とし、子どもの遊び・生活得点(自主性、共感性、表現・鑑賞得点も含む)を従属変数とする重回帰分析の結果を表5に示す。性別、塾・

習い事、遊び友達の数との間に関連性が認められた。しかし、児童館利用頻度との関連性は認められなかった。

そこで、児童館利用頻度に何が影響を与えているのか検討するために、今度は児童館利用頻度を従属変数として、性別、塾・習い事、遊び友達の数、遊ぶ頻度、学童保育経験、子どもの遊び・生活得点を独立変数とする重回帰分析を行った。その結果、遊び友達の数のみ有意差が認められた(表6)。図6は、これらの結果を図式化したものである。

IV 考 察

(1) 遊びの実態

高度経済成長期を境にして、産業化と都市化に伴う地域社会の崩壊とともに、ガキ大将に率いられた異年齢の仲間集団もまた衰退の一途をたどっていった⁴⁾。塾や習い事に通っている子どもが多く、遊び時間が限られ、地域で遊ぶことができる友達が減少しているために、仲間集団が少人数化していると言われている。本調査でも、7割が塾や習い事に通っており、学校では友達が15人以上いると答えた子どもが6割弱を占めていたが、実際に家に帰ってから遊ぶ友達は3～4人と答えた子どもが半数を占めていた。しかも、約6割の子どもがクラスの友達、すなわち同年齢の友達と遊んでおり、近所の異年齢児と遊ぶ子どもは約3割と少なくなっていた。また、「ほとんど毎日」友達と遊ぶと答えた子どもも3割いたが、「週1～2日」しか遊ばない子どもも3割おり、わずかではあるが「まったくない」と答えた子どももいたことに留意する必要がある。

高度経済成長期以前、子どもの遊びの隆盛期には、営利主義的な与えられた玩具はなく、子

表5 子どもの遊び・生活得点(自主性、共感性、表現・鑑賞)との関連性(重回帰分析)

従属変数 独立変数	子どもの遊び・生活得点		自主性得点		共感性得点		表現・鑑賞得点	
	標準化係数:β	有意確率	標準化係数:β	有意確率	標準化係数:β	有意確率	標準化係数:β	有意確率
性別	-0.312	0.000	-0.207	0.000	-0.260	0.000	-0.369	0.000
塾・習い事	-0.121	0.001	-0.110	0.003	-0.096	0.007	-0.010	0.766
遊び友達の数	0.175	0.000	0.146	0.000	0.178	0.000	0.072	0.050
遊ぶ頻度	0.055	0.120	0.039	0.285	0.057	0.116	0.012	0.740
児童館利用頻度	0.045	0.120	0.026	0.470	0.064	0.075	0.016	0.638
学童保育経験	-0.013	0.199	-0.001	0.968	0.006	0.869	0.028	0.412
	R=0.350 R ² =0.123		R=0.256 R ² =0.066		R=0.309 R ² =0.096		R=0.357 R ² =0.128	

注 1) 自主性得点、共感性得点、表現・鑑賞得点、性別、塾・習い事、遊び友達の数、遊ぶ頻度、児童館利用頻度、学童保育経験については表4と同じ。

図6 子どもの遊び・生活得点に関する要因

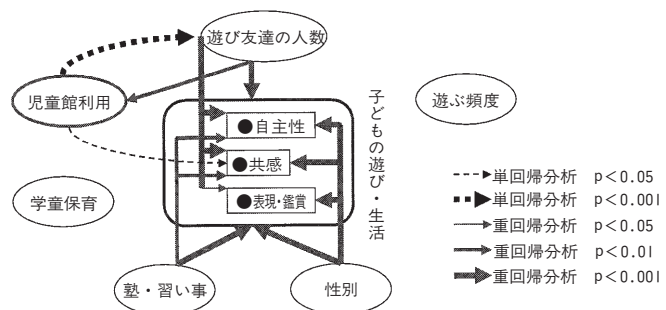


表6 児童館利用頻度との関連性(重回帰分析)

独立変数	非標準化係数		標準化係数:β	t	有意確率
	B	標準誤差			
定数	-0.257	0.236		-1.093	0.275
性別	0.053	0.041	0.052	1.289	0.198
塾・習い事	-0.043	0.038	-0.042	-1.133	0.258
遊び友達の数	0.112	0.040	0.109	2.775	0.006
遊ぶ頻度	-0.025	0.039	-0.024	-0.652	0.515
学童保育経験	0.053	0.038	0.051	1.396	0.163
子どもの遊び・生活得点	0.095	0.074	0.050	1.285	0.199

注 1) R=0.159, R²=0.025

2) 児童館利用頻度、性別、塾・習い事、遊び友達の数、遊ぶ頻度、学童保育については表4と同じ。

どもたちは主に戸外で群れをなして遊んでいた。この時期の遊びの特徴は、活動的な外遊びであり、縦横の連帯性のある集団的組織的なものであり、また日常生活と結びついた遊びであり、協力しあって作り工夫する創造的なものであった²⁾。しかし、最近の子どもたちの遊びは、戸外の遊びよりもパソコン、テレビゲームなど室内での遊びが登場し、遊戯活動が個人化・室内化していると言われている³⁾。本調査でも、家の回

りや公園などでスポーツや運動をする子どもが約半数いたが、室内でパソコン・テレビ・ゲームをして遊ぶ子どももほぼ同数いた。

以上のように、本調査からも、少人数で同年齢の友達と室内でパソコン・テレビ・ゲームなどの個人化・室内化した受動的な遊びをしている子どもの姿が明らかになった。

(2) 子どもの遊び・生活に関する項目

子どもの遊びと生活に関する項目の平均得点を男女別にみると、「運動やスポーツをすることが好き」以外のほとんどの項目について、男子に比べ女子の方が高くなっていた。児童健全育成研究会⁵⁾の報告においても、自立性、規律の遵守、共感性、芸術的表現や活動に対する親和性、家事への積極的参加といった面で、男子より女子の得点が高くなっていた。

子どもの遊びや生活の構造を明らかにするために、子どもの遊びと生活に関する項目の因子分析を行った。その結果、「自主性」「共感性」「表現・鑑賞」の3因子が抽出され、男女によって因子の現れ方が異なっていたが、いずれの因子得点も女子の方が高くなっていた。

子どもは発達に伴って、お互いに活動的で一貫した協力を行うようになり、向社会的行動(分配、援助、同情など)は安定した仲間関係の有力な特性となり、偶発的な行為というよりも規範となってくると言われている⁹⁾。例えば、4歳から12歳にかけて、仲間との分配行動や他者への同情や共感性が増大する。また、精神医学者のサリヴァンも、児童期を人格発達の重要な時期とし、学童期、特に小学校高学年から中学校にかけての前思春期において、「同質親和性」(同じ年ごろで同じ性の者同士が強い共感や深い親しみの感情を持ってつながりやすいこと)が獲得されると言っている¹⁰⁾。以上のことから、特に女子にこの特徴が顕著に現れているのではないかと推察される。

(3) 児童館の利用と子どもの遊び・生活との関連

平成10年の児童館に関する全国調査⁶⁾からは、

「よく利用する」(5%)、「ときどき利用する」(11%)を合計した16%の子どもが児童館を利用していることが明らかになった。本調査では、児童館を利用したことのある子どもは23.7%であり、全国調査と比べて多くなっていた。小学生を持つ保護者を対象としたB市の調査¹¹⁾では、90.8%の保護者が児童館・児童センターを知っており、47.8%が利用したことがあり、55.2%が今後利用したいと答えている。児童館を利用している子どもの中には親に車で連れて来てもらっている者もあり、児童館が近くにないために知らず、また、子どもだけでは利用しにくい状況にあることが推察される。

児童館を利用している子どもと利用していない子どもの遊び・生活得点については有意差が認められなかったが、「いろいろな遊びを知っている」「心配事を聞いてあげられる」という共感性にかかわる項目については、児童館を利用している子どもの得点が高くなっていた。また、得点の高い群・中間群・低い群を比較すると、高い群に児童館を利用している者が多く、有意差が認められた。児童館の現状と可能性に関する調査研究会⁶⁾の報告においても、児童館を利用する子どもは、家族や友達、趣味・特技などに関心が高く、コミュニケーション指向、自己表現指向であることを指摘している。

単回帰分析の結果、児童館の利用頻度は、子どもの遊び・生活得点の1つの変数である共感性や、遊び友達の人数と関連性があった。すなわち、児童館を利用することによって子どもの共感性が高くなり、遊び友達の人数も多くなると思われる。しかし、他の要因との関連性からみた重回帰分析の結果からは、子どもの遊び・生活得点に影響を与える要因は、性別、塾・習い事、遊び友達の人数であり、児童館利用頻度との間には関連性が認められなかった。女子、塾や習い事をしている子ども、遊び友達の多い子どもは、子どもの遊び・生活得点が高くなると思われる。したがって、児童館の利用頻度が直接的に子どもの遊び・生活得点に影響を与えるのではなく、他の要因と絡み合って影響を与えているのではないかと推察される。そこで、

児童館利用頻度を従属変数とする重回帰分析を行った結果、遊び友達の人数のみに関連性が見いだされ、児童館の利用頻度に影響を与えるのは遊び友達の人数であり、遊び友達が多い子どもが児童館をよく利用することが推察される。

V 結 語

以上のとおり、児童館を利用する子どもは遊び友達が多く、また児童館を利用することによって遊び友達も多くなることが明らかになった。遊び友達が多い子どもほど子どもの遊び・生活得点が高くなっており、子どもの仲間集団の重要性が示唆された。

住田³⁾は、子どもは仲間集団に参加し所属することによって社会化されていくが、①子どものそれまでの家族集団のなかでの社会化の継続を修正する、②仲間との集団的遊戯活動という共同行為を通して、子どもたちの間に連帯感と情緒的関係（親密な仲間意識）が形成され、子どもは対人関係の安定性と情緒的安定性を感じとり、自己を肯定的に評価することができる、③協力、競争、妥協といった対人関係能力を培うことができると述べている。

門脇¹²⁾は、今日、子どもが社会に適応できる「社会性」ではなく、社会を作り、作った社会を運営しつつ、その社会を絶えず作りかえていくために必要な資質や能力である「社会力」を育成することが必要であると指摘している。さらに、社会力が本来の機能を発揮するためには、その下地として十全な他者認識や他者への共感能力が備わっている必要があり、この社会力を育てるためには、子どものどの発達段階においても、他者との相互行為が何より大切であると述べ、社会力が形成される場として地域社会を重視している。

今日、地域社会の遊びの拠点として位置づけられけた児童館は、子どもが豊かな遊びを展開し、子ども同士・子どもと大人の相互行為を通じて社会力や対人関係能力を育てることができるとして重要な役割を担っていると言える。

謝辞

本研究のアンケート調査にご協力をいただいた小学校の職員と児童の皆様へ心より御礼申し上げます。また、本研究は川崎医療福祉大学平成15年度プロジェクト研究（研究代表者：八重樫牧子）の一部であり、同大学より助成を受けたことを感謝申し上げます。なお、本研究の結果は、日本社会福祉学会第52回全国大会において報告を行った。

文 献

- 1) 深谷昌志. 孤立化する子どもたち. 東京：日本放送出版協会, 1983；20-46.
- 2) 岩佐玲子. 遊びの衰退. 高橋勝, 下山田裕彦編. 子どもの〈暮らし〉の社会史. 東京：川島書店, 1995；68-70, 115-129.
- 3) 住田正樹. 子どもは仲間集団によって育つ. 日本子ども社会学会編. いま、子ども社会に何がおこっているか. 京都：北大路書房, 1999；38-54.
- 4) 佐藤一子. 子どもが育つ地域社会 学校五日制と大人・子どもの共同. 東京：東京大学出版会, 2002；67-76.
- 5) 児童育成研究会（代表：岡本奎六）. コミュニティ施設利用の子どもの人間形成に及ぼす学際的研究（昭和63年度調査研究報告書）. 東京：伊藤忠記念財団, 1988；240-60.
- 6) 児童館の現状と可能性に関する調査研究会. 児童館の現状と可能性に関する調査研究（平成9年度（財）こども未来財団委託調査）. 東京：全国児童館連合会, 1997；26, 53-5.
- 7) 八重樫牧子. 児童館の利用が子どもの遊びや生活に与える影響. ノートルダム清心女子大学紀要 生活経営学・児童学・食品栄養学編 2004；28(1)：100-7.
- 8) 厚生統計協会編. 国民の福祉の動向. 厚生指標 2004；51(12)：12.
- 9) Damon W. (山本多喜司編訳). 社会性と人格の発達心理学. 京都：北大路書房, 1990；166-8.
- 10) 服部祥子. 学童期はいかなる発達段階かー精神医学的視点より. 服部祥子編. 小学生メンタルヘルス・エッセンス ころの危険信号. 東京：日本文科学社, 1995；11-3.
- 11) 倉敷市. 倉敷市子育てに関するアンケート調査 調査結果報告書. 岡山：岡山県倉敷市, 2004；83-5.
- 12) 門脇厚司. 子どもの社会力. 東京：岩波書店, 1999；59-72.

注

- 1) 2003年7月に「次世代育成支援対策推進法」が公布され、同年8月に厚生労働省より「行動計画策定指針」が発表された。この指針には、地域における子育て支援として「児童の健全育成」が取り上げられ、「健全育成の拠点施設の一つである児童館が子育て家庭が気軽に利用できる自由な交流の場として、絵本の読み聞かせや食事セミナーの開催等、親子のふれあいの機会を提供するとともに、地域における中学生・高校生の活動拠点として、積極的な受け入れと展開を図ることが必要である」と指摘されている。
- 2) 児童育成研究会（代表：岡本奎六）が実施した「児童館・図書館アンケート調査」の児童館の利用効果に関する15項目（表2参照）を一部修正して使用した。尺度の信頼性の検討を行った結果、 α 係数=0.8358であったので、尺度の内的整合性が高いと判断された。